

学校法人岩谷学園 岩谷学園よこはま IT ビジネス専門学校

令和 8 年度 学校関係者評価委員会報告書
(評価対象期間：令和 7 年 4 月～令和 8 年 3 月)

1 学校関係者評価委員会実施要項

開催日	2026 年 5 月 21 日
開催場所	岩谷学園 3 号館 (対面とビデオ会議システムのハイブリッド)
参加者	【学校関係者評価委員】 神橋憲治 神奈川県立大和南高等学校 鈴木克彦 株式会社 ReadBell 洪心路 山口県立大学 赤松龍男 株式会社グランドワン 【教職員】 上田保志 校長 立花明美 副校長 原田啓子 学科長
評価対象	日本語科 2 年制・日本語科 1 年半制 経営マネジメント科・情報ビジネス科・日本語研究科
配布・公開資料	学校自己点検・自己評価表

次第

- 校長挨拶
- 委員紹介
- 2025 年度活動報告
- 評価委員からの評価・総括

2 令和 7（2025）年度の学校事業概要報告

学科構成	
	専門教育部門 経営マネジメント科（2 年課程） ※専門士 情報ビジネス科（2 年課程） ※専門士 日本語研究科（1 年課程） 日本語教育部門 日本語科 2 年制（2 年課程） 日本語科 1 年半制（1 年半課程）
教育理念・目的・目標	
	教育理念（ 建学の精神） わが学園は、教育を通して「努力心」「誠実心」「独立心」を養い、平和社会の建設に貢献する人間を育成することを使命とする 教育目的 （専門教育部門） 「努力を継続する人になる」「いつも誠実であり信頼を勝ち得る人になる」「自立し、自身の決定に責任を持つ人になる」強い気持ちと覚悟を持ち、日本また母国で「平和を作る」グローバル人材として堂々と働くことができる人材となれるよう、必要な専門知識・技能及びマインドを養うことを目的とする。 （日本語教育部門） 「努力を継続する人になる」「いつも誠実であり信頼を勝ち得る人になる」「自立し、自身の決定に責任を持つ人になる」強い気持ちと覚悟を持ち、日本また母国で「平和を作る」グローバル人材として堂々と働くことができる人材となれるよう、次のステップとしての進学に必要な日本語能力を養うことを目的とする。 教育目標 （専門教育部門） ・ 自己理解を深め、自身が希望する社会貢献の形に合った就職先への就職を可能とするための専門知識・技能及びマインドを養う （日本語教育部門） ・ 目標とする進路先で求められる日本語力を身につける。 ・ 日本で学び日本で働くために、日本事情への理解を深め社会人としての基礎を養う。

	・自分自身で目標を設定し、自律した学習や行動ができる。 ・互いを尊重し、社会の一員として柔軟に対応できる力を養う。	
重点的に取り組んだ目標・計画		
	・進路実現率 98%以上の達成（就職・進学） ・学校教育法改正に対応する学則変更 ・学科一体運営に資する号館使用、引っ越しプロジェクト ※専門教育部門 ・時代に即したカリキュラム変更（経営マネジメント科・情報ビジネス科） ・新たな募集スキームの展開（指定校推薦、広域現地入試（名古屋）追加） ※専門教育部門 ・対象を拡大した高校連携教育交流授業の成功（受講者数 10 名以上、修了率 80%以上） ・認定日本語教育機関申請準備（2026 年度第 1 回申請に向けての準備）※日本語科 ・仕組みで動かす学科運営の体制作り、教育の質の向上 ※日本語科 ・寮運営のスリム化・効率化 ※日本語科	
進級・卒業		
	進級	
	経営マネジメント科	在籍 54 名
	情報ビジネス科	在籍 52 名
	日本語科 2 年制	在籍 161 名
	日本語科 1 年半制	在籍 26 名
		進級 51 名（94.4%）
		進級 52 名（100%）
		進級 157 名（97.5%）
		進級 26 名（100%）
	卒業	
	経営マネジメント科	在籍 51 名
	情報ビジネス科	在籍 48 名
	日本語研究科	在籍 58 名
	日本語科 2 年制	在籍 124 名
	日本語科 1 年半制	在籍 86 名
		卒業 51 名（100%）
		卒業 47 名（97.9%）
		卒業 55 名（94.8%）
		卒業 117 名（94.3%）
		卒業 80 名（93.0%）
学校行事について		
	【経営マネジメント科・情報ビジネス科・日本語研究科】	
	・新入生研修（4/17～18） ・就職研修・2 年生（5/21） ・学園祭（9/6） ・校内スピーチコンテスト（10/22） ・秋季研修旅行・2 年生（11/5～6） ・スポーツ大会（11/25）	

	・就職準備研修・1年生（12/9） ・卒業制作発表会（2/25） 【日本語科】 ・進学フェア（5/23） ・学園祭（9/6） ・避難訓練（11/27） ・秋季校外学習・2年生（12/11） ・秋季校外学習・1年生（12/18） ・日本文化授業・書道（1/7～24） ・日本文化授業・落語（1/16） ・神奈川専修学校各種学校協会横浜支部主催スピーチコンテスト（1/27） ・校内スピーチコンテスト（2/12）
教育交流事業について	
	教育交流： 教育実習生受入（日本語科・11/4～14） 学習院大学より実習生受入 岩谷学園ひがし北海道日本語学校との交流（日本語科・1/21） ビデオ会議システムを用い、各校紹介、地元紹介をはじめとする学生同士の交流 高校連携交流（日本語科・2/16～19） 横浜市内の高校（横浜雙葉中学高等学校・高等部）の生徒と1 on 1の対面会話を 行い、互いの文化紹介・自身の進路について話し合う日本語実践 高校連携授業（専門課程・4/19～8/5） 教育交流「聴講生」ビジネス基礎講座（全15回）を実施 高校生が本校のビジネス関連授業を体験し、将来の選択肢を増やすための講座 高校連携授業（専門課程・8/6～8） ビジネスマナー、オフィス系ソフトのビジネス使用体験、会計の基礎知識を学び、 ビジネス教育を提供する専門学校の学修内容体験の場を提供 企業連携： 就職面接研修（5/21）：企業参画あり インターンシップ： 各企業（経理ビジネス科・情報ビジネス科）⇒単発の就業体験
外部表彰について	

	【経営マネジメント科】 ・全国経理教育協会 高瀬賞 【情報ビジネス科】 ・神奈川県専修学校各種学校協会 会長賞 【日本語研究科】 ・全国専門学校日本語教育協会 優秀学生表彰 【日本語科】 ・一般社団法人全国日本語学校連合会 会長賞 【日本語科】 ・一般社団法人神奈川県専修学校各種学校協会 テレビ神奈川賞
取得資格	
	【経営マネジメント科】 ・全経簿記検定 3 級 47 名 (51 名中) 2 級 商業簿記 32 名 (51 名中) 2 級 工業簿記 41 名 (51 名中) ・日商簿記検定 3 級 1 名 ※希望者のみ受験 2 級 1 名 ※希望者のみ受験 ・Microsoft Office Specialist - Word365 44 名 (49 名中) - Excel365 39 名 (49 名中) 【情報ビジネス科】 ・Web クリエイター能力認定試験スタンダード 40 名 (52 名中) ・Access ビジネスデータベース技能認定試験 3 級 39 名 (52 名中) ・Java プログラミング能力認定試験 3 級 23 名 (47 名中) 【日本語科】 ・日本語能力試験 (JLPT) - N 1 8 名 - N 2 73 名 - N 3 97 名 - N 4 15 名

3 基準項目ごとの学校関係者評価・意見等

令和7年（2025年）度の自己点検評価報告をもとに、基準項目ごとに学校から説明がなされ、評価を行った。

	主項目	評価
1	教育理念・目標	教育理念から目的、目標への流れがあり、一貫した教育活動に取り組んでいる。 また、特色のある教育活動への取り組みを継続している。 課題として、教育理念と日々の教育内容をしっかり連動させ、明確にすること、そして教員間で共通の認識を持つことが挙げられる。また、学生への周知・理解の浸透の面で学校が課題有りと考えている。 教育理念の授業現場への落とし込みを教員が共通の認識を持ち、同じ温度感で取り組むことが必要であろう。
2	学校運営	学校運営の基本はできている。 例年の課題となっている「情報システム化による業務効率」については依然として課題感が強い。 学生数が多く、それなりの規模があるため、DXによる業務効率化は重要な課題と言える。 現状、オンプレでのデータ管理をしているが、今やクラウド化は常識であり、被災の際のリスクを考えてもクラウド化は必須と言える。個人情報の漏洩は大きな問題であり「誰が責任を取るのか」となってくる。 DXプロジェクトを進める計画が学園としてあり、クラウド化は決定しているとのことなので、その推進に期待したい。
3	教育活動	教育活動についても基本はできおり、学科ごとに特徴のある教育活動を展開している。 日本語科においては認定日本語教育機関申請のための教育課程を作成し、申請を進めている。 専門課程においては、昨年から進めていた情報ビジネス科のカリキュラム内容の変更を行った。 課題として、能力開発、指導力育成、資質向上のための研修の必要を感じている教職員が多い様子。 学園・学校での全体の研修は計画的に組まれているが、この専門性を高めるための個別の研修についても、研修プロジェクトとして数年単位で計画・実施することを提案した。

4	学修成果	質の高い教育活動を展開し、それぞれの学科において良好な学習成果を上げている。 成績評価判定基準を明確に定め、進級判定会議、卒業判定会議を適正に行っている。 知識・技能の習得という面では学校自身の評価も高く、相応と考えられる。 一方で、キャリア支援に課題を感じている。キャリアサポート専属部署が他部門にあり、学校との連携が必要であるが、その連携・効率化を進めて欲しい。 卒業後のキャリア形成、社会的な活躍の把握として、学園の「校友会」の更なる活用を昨年提案したが、校友会が動いていないとのこと。校友会を動かす仕組みに変えていくため会則の改正を現在進めているとのことなので、引き続き注力して欲しい。 また、卒業生進路実現成果を卒業生から在校生に直接伝える機会を設けることも昨年提案したが、こちらは実施しているとのことなので、継続しつつ改善を図って欲しい。 外部への発信のためには、学習成果の正確な把握は不可欠であり、この面でも DX を進め効率よく成果を把握・発信できる体制を構築して欲しい。
5	学生支援	在校生に対しては、相応しい支援がなされている。 欠席者へのフォローや、定期面談、必要に応じた面談など、フォローのスキームは確立している。 年度途中の退学者が少なく、進級率・卒業率が高いことに適切な支援が表れていると言える。 ただ、母語支援の面において、ベトナム人学生が多い中、その母語対応が十分ではないとの課題感を日本語科で強く持っており、昨年の A 評価から B 評価に下がっている。 次年度においてベトナム人学生を採用することが既に決まっており、またその人材も決まっているとのことなので、改善されることを期待する。神奈川県立高校で採用しているコーディネーターの配置なども参考にできると思う。
6	教育環境	教育環境として専修学校設置基準、日本語教育機関告示基準を満たしており、基本はできている。 専門課程において、メインとなる 3 号館から大きな交差点を渡る位置にある 4 号館という「距離感」のある 2 棟での運営

		に学科運営の難しさがあったが、「引っ越しプロジェクト」により改善し、隣同士の号館での運営ができるように改善した。 また、日本語科の運営に関しても、1 クラスだけ別の号館での授業という状況の打破のため、3 階ホールを改造し教室を増設するなどの努力をしている。 各号館において空調、外階段などの大掛かりな工事も計画的に進めており、その点も評価できる。 防災体制の強化の面で学校が課題感を持っているが、重要事項のため、然るべき取り組みをしていって欲しい。 また、新学期が始まったものの、情報ビジネス科の授業での PC トラブルが散見される。専門家ではない教員がその対応に追われるなど、「教員任せ」になってしまっている点はいただけない。PC 購入時にセットアップまでしっかり完了させた状態での納品とするなどの工夫を提案した。
7	学生の受け入れ募集	2026 年度開講に向け、日本語科、専門課程ともに入学定員を満たす学生を獲得することができている。 専門課程においては、かなりの高倍率の入学試験となり、入学者の厳選もできている。 入学選考結果を入学後の学生指導、授業改善等に活用しているかどうかの問いに対しては課題有りとの認識を学校が持っている。 この点においてデータベース化の推進が期待される。入口から出口まで、さらには卒業後を含め、学生一人ひとりの歩みを把握・抽出できる仕組みの構築が、学生の受入れ募集の好循環につながっていくはずである。 専門課程の経営マネジメント科、情報ビジネス科については教材や検定試験の受験料高騰に合わせた教材費の見直しを図っているとのことだが、そのような取り組みも安定した学校運営のために必要である。
8	財務	赤字部門であった保育士養成科の学科廃止後の安定した学生募集（定員充足）により財務状態は良いものである。2025 年度中に続き 2026 年度も総定員 660 名を満たす想定が現実的なものであり、財務的に問題はない。
9	法令等の遵守	大きなところでは、学校教育法改正に対応し、時間制から単位制への移行、学則変更、カリキュラム変更を済ませている

		ことを確認した。 県による現況調査への対応、高等教育修学支援新制度対象校認定、留学生部門は入管庁からの適正校認定など、専修学校設置基準の要件を満たしている。日本語科は適正校（クラス1）と認められている。 個人情報保護のための対策を実施し、また著作権に関しても授業目的公衆送信補償制度（SARTRAS）を活用し、著作権法第35条の運用指針に対応している。 また、著作権に関する研修を教員向けに実施している。
10	社会貢献・地域貢献	昨年再開した地域ボランティアの継続ができていないようである。自己評価としては低くなっているが、ボランティア活動が社会貢献の全てというわけではなく、後述する教育交流なども大変良い取り組みであり、もっと評価を上げて良いのではないかな。 何とかしてボランティアを、ということであれば、ライオンズクラブやロータリークラブとの連携を視野に入れても良いのではないかな。 県内の公立高校からの聴講生の受入れ、同じ横浜市内の私学高校からの交流授業受入れなど、教育リソースの地域還元は継続して行われている。 また、県立高校側のニーズ、要望に合わせカリキュラム内容を改変するなど協力的な対応をしている点は評価できる。
11	国際交流	県内でも屈指の留学生受け入れをしている学校であり、受入から卒業までのスキームが確立されている。 入管庁から適正校の認定も受けており、在籍管理も適正に行われている。 日本語科においては適正校の中でも「クラス1」を獲得するなど、適正な在籍管理を行っており、適切な国際交流ができていると捉えられる。さらに次年度は生活指導員の増員予定である点を評価できる。

総評

学校として、全体としては真摯な取り組みが感じられる。学校としての自己評価に異論はなく、妥当と考える。

評価委員の個々の所感は下記の通り

①校友会の活用

歴史ある学校として多くの卒業生がいるので、校友会をもっと活用できる仕組み作りに期待したい。就職の斡旋であったり、日本の企業についての理解を深める助け、在校生支援など、卒業生の力も借りて、在籍学生の進路実現、その後の活躍を支援できるなら、さらに良い循環を作り出せる。

②学生が置かれている状況への理解

現在の物価高騰には家賃の高騰も含まれ、学生の生活基盤に大きな影響を及ぼしている。学生にとっては、学校とアルバイトを両立しながらの生活のため駅近物件が望ましいと考える。学生を近くで見ている立場として何とかしてあげたい気持ちでいる。

学生たちは一生懸命に学業、日常生活と向き合っているので、学校の先生方も、そのような視点で学生たちを見守り支援して欲しい。

③教員の働き方

私学の専門学校として、県立高校との違いを感じた。私学ということもあり、収支に関してはシビアな部分がある。共通しているのは、教員は学生に寄り添い、「何とかしてあげたい」と考えているということである。学生を思うがゆえに教員は「頑張る」ものであるが、その頑張りに甘えないことも大切である。研修や DX といった取り組みも取り上げられたが、どういった仕組みで課題を解消していくのか検討・取り組みに期待したい。

④出口の充実化

留学生は、母国から日本に留学することによりマジョリティからマイノリティに立場が変わり、自身の経験からもその変化のたいへんさは大きなものであると言える。母校の先生方が学生を大切に思い支援してくれていることに感謝している。留学生にとって出口の支援はとても重要であり募集にも影響してくるため、引き続き出口の充実化を図って欲しい。OB・OGの活用、就活イベントの充実化など、具体的な取り組みのブラッシュアップに期待したい。